大地しんから学ぶ

羽月西小学校　五年　田代　絢心

七月二十八日の午後四時半ごろ、ぼくは学校のプールで友達と水にもぐっていた。水から顔を出したとき、父の大きな声が聞こえた。

「すぐにプールから上がって。」

プールから上がると、地面が大きくゆれていた。令和八年熊本地しんだった。

家に帰り、ニュースを見ると、ばくはつしたイオンやくずれた家、ひなんした人々についてうつされていた。次の日も、その次の日も、地しんについて大きく報道されていた。その報道の中でもぼくが特におどろいたのは、ひさいした人々の生活だった。

ひさいした人々は、ひなん所や車の中で、電気も水もない生活をしていた。車中泊をしている人もいたが、ガソリンスタンドに入れず、ガソリンを入れられなくて困っていた。気温が三十五度以上にもなり、熱中症になって亡くなってしまった人もいた。

病院に入院している人はもっと大変そうだった。入院していた病院がこわれてしまい、転院しないといけない人もいるとのことだった。重い病気やけがの人もいるのに、他の病院に行くのはつらいし、とても大変だろうと思った。

熊本では大変なことになっているが、となりの県に住んでいるぼくは、いつも通り生活をしている。水があるし、電気もある。家で家族といっしょにいることもできるし、外で友達と遊ぶこともできる。いつも通りすごしているこの生活をふつうのことだと思ってきたが、それはちがうと思った。この生活は、さいがいにあっている地域や国だとふつうのことではなく、今のぼくの生活は幸せなのだと気付いた。

ぼくは、これまでニュースを見ても、どこか遠い世界の出来事で、自分には関係ないような気持ちで見ていた。しかし、今回伊佐市も大きくゆれた地しんをけいけんしたことで、近くでもさいがいが起こることに気付いた。もしかしたら、ぼくの住んでいる伊佐市でもいつか大地しんや大雨などのさいがいが起きてしまうかもしれない。

ひさい地の方々のために、ぼくにできることは何だろう。ぼくは、ぼ金ならできると考え、ぼ金箱にぼ金した。そして、他にできることはないか、父と母に相談した。母は、昔、旅行中に東日本大しんさいにあい、ホテルのテレビでつ波の映像を見たことを話してくれた。父は、直接役に立つことはむずかしいが、ふだん当たり前のように使っている電気や水、食べ物を大切にすること、いつもそばにいる家族を大切にすることを教えてくれた。ぼくは父から教わったことを決して忘れない。

日本は、さいがいが多いからこそ、ふだんの生活を見直して、非常用の物を準備するなど、対さくしておく必要がある。

一日でも早く、熊本の人がこれまでのような生活にもどれることを願っている。